

パネル・ディスカッション「戦後思想における全国唯研の歴史と現代の課題」報告

エコロジー・コミュニケーション問題と唯物論

尾関 周二 OZEKI, Shuji

はじめに

全国唯研の30周年記念ということですが、それで思いおこすのは、私が東京農工大学に職を得て、京都から東京にきてちょうど30年になることです。それで、私の東京での学会・研究活動と全国唯研の誕生から現在までは、ほぼ重なっているといえます。発足して間もない全国唯研で、中央大学の長沼さんや都立商科短大の仲本さんが事務局長をされていたときに、そのもとで事務局幹事(当時は事務局員とっていたかもしれません)をやりました。その後、委員に選出されて、編集委員会、企画委員会の責任者や学会委員長などをやることになりましたので、私なりに、唯研に関しては、学会の内側からずっとその展開をみてきたといってもよいかと思えます。したがって、パネル・ディスカッションのテーマである「戦後思想における全国唯研の歴史と現代の課題」を、いわば思想のレベルにおける「自分史」に引き付けるという仕方述べてみたいと思えます。

ところで、あらかじめ全国唯研の良い点をまず述べておくならば、教条にとらわれず、現代的な課題をたえず取り上げてきたことや論争はするが多様な意見を尊重する包容力をもってきた点にあると思えます。また、戦前の唯研からの伝統ですが、哲学を核としながら人文・社会科学、自然科学の諸科学の学際的な研究組織である点があります。また、若い人々の活力を生かそうと意識的に努力してきたことも挙げられると思えます。

30周年を迎えた現時点で改めて考えると、こういった全国唯研の性格は全国唯研が生まれた時代の大きな変化とふれあっていた面もあると思えますので、まずは、その時代の私なりの理解に簡単にふれて、その後再びその意義と課題を述べてみ

たいと思えます。

1 〈戦後〉：70年代前半を境に大きく転換

日本の戦後は、多くの論者が指摘しているように、70年代前半を境に大きく二つに区分されると思えます。それはこれを境に出現してきたいくつかの印象的な言葉を思い起こすことによって時代の転換を理解できます。私自身は団塊世代の最初として65年に大学に入学し、当時、京都の駅裏に広がっていたスラムでのセツルメント活動、例の「大学紛争」や革新自治体の誕生のうねりを経験しましたが、大学院を終えたあたりから次第に社会の変化が起こりつつあることを感じました。

「石油ショック」「保守化」「成長の限界」「ポスト構造主義」「社会史」「豊かな社会」「過労死」「死に至るいじめ」などは70年代前半以降に生まれて、それ以前の高度成長期との対照をなし、この変化を象徴するものであるといえると思えます。70年代後半に誕生した全国唯研の誕生そのものもまた、こういった時代の転換の流れのなかにあったことは忘れてはならないことだと思います。

さて、今日の時点から振り返ってみますと、20世紀の最後の四半世紀は、19世紀なかば以降の資本主義的世界システムが外延的、内包的に拡大しつつ、地球上のすべての民衆・市民の生活世界を包摂し、文字通りのグローバル資本主義を誕生させた時期と理解されると思えます。そしてまた、この四半世紀にはソ連型社会主義国家の歴史的崩壊や福祉国家の大きな動揺ということがありました。20世紀最後の四半世紀は19世紀の自由放任の資本主義に逆流・回帰したかのよう、「新自由主義」の旗のもとに、競争主義や格差拡大をもたらして、まさに時代が一回転したかの感がありま

す。マルクスの資本主義社会の階級分析のある意味での正しさをも改めて示しているように思われます。その意味では、資本主義的近代化の進行とともに生まれた「社会の防衛」(カール・ポランニー)に似たさまざまな抵抗運動もまたこれまでのものの活性化だけでなく新たな形態もまた種々生じつつあると思います。

そして、同時にまた重要な時代の認識は、この四半世紀は、70年代前半の「石油ショック」によって始まったことに見られるように、近代の社会システムが化石燃料に依存して発展したという「自然と社会の物質代謝」から切り離されたシステムとしての根本的な脆弱性が露呈された時代であるということです。そして、ソ連型「社会主義」をも含めた資本主義的<近代化>の問題性を見据え、資本主義批判に加えて近代批判の課題が明確に意識されるようになったことが重要と思っています。

そして、ちょうどこの時期に、東京という矛盾に満ちた世界都市に存在する農学部において研究活動が続けることのできた私は、いわば資本主義的市場経済の拡大がもたらした二大病理現象の露呈ともいえる、生活世界に苦悩と死をもたらすコミュニケーション病理(共同性原理の解体)と地球規模にまで達した自然環境の破壊に関心をもって研究することができたと思います。そして、このコミュニケーションの問題とエコロジーの問題は、近代以降の人間-人間関係と人間-自然関係の諸問題を象徴するものであり、両者は密接に結び付いていることの認識が重要であると考えました。そして、このエコロジー・コミュニケーション問題を、しばしば、略して「エコ・コミュニケーション問題」と呼んできました。

つまり、この20世紀最後の四半世紀は、たとえポストモダニズムが一過性の流行現象に終わったとしても、上記のように、資本主義的近代化の原理が自然と人間精神の破壊を進めていることが明らかに認識されるなかで、資本主義批判にとどまらず、これまでになく近代批判の志向が本格的に始動しはじめたといつてよい時代かと思っています。

マルクス自身の思想には、資本主義批判と同時に、近代批判の視点があったわけですが、ソ連型マルクス主義は、ロシアの時代状況の制約もあって、近代批判の視点は欠如して、むしろ近代主義の性格を色濃くもっていた点が特徴的であったと思います。

興味深く象徴的なのは、近代啓蒙の純化された理念によって建国されたアメリカ合衆国において20世紀の後半出現した二つの論争です。それは世界的な思想的論争になり、今日も続いています。その哲学的な原理的性格のゆえに、この論争は、この〈近代批判〉を象徴するものといえると思います。その二つの論争とは、エコロジーにおける自然中心主義と人間中心主義の論争であり、もう一つは、「リベラル-コミュニタリアニズム論争」と呼ばれるものです。前者は、人間-自然関係に関して、もっぱら人間にとって資源等として価値づけられてきた自然に対して、自然そのものの固有の価値をとらえねばならないとする自然観として、近代以降の自然観に対して、大きな転換を迫るものであったといえます。後者は、近代社会観の根底にある個人主義、自由主義に対して、人間にとって共同体の本質的意義の再考を迫るものであったと言えます。これらは、私なりにエコロジー・コミュニケーション問題と理解したいと思います。

2 全国唯研の意義

全国唯研の意義は、上述したような時代の大きな変化に対応しようとした点に大きな特徴があるのではないかと思います。とりわけ、この学会の基礎にはマルクス思想の深化という課題があったと思いますが、それ以前の唯研と違って、上述したような近代批判の課題を意識的に追求し、その視点からマルクス思想を再構成・発展させようと思欲したメンバーが少なくなかったことが一つの重要な特徴をなしていると思います。しかもまた、以前の唯研にはしばしばみられた特定の支配的な潮流が排他的・党派的に振舞うようになることな

く、種々の潮流が共存・共生した点もまた特筆すべきことだと思います。

繰り返しになりますが、全国唯研は、70年代以降の社会変動が提起した種々の新たな問題に積極的対応をしましたが、このことが可能になったのも、それはまた近代批判への志向を内包していたこととも深くかかわっていたといえると思います。この点がそれ以前のいくつかの唯研との違いをなし、したがって、多かれ少なかれ、大枠では「ソ連型マルクス主義」を規範にしていた以前の唯研から脱「ソ連型マルクス主義」の過程を通じて、マルクス思想の革新を追究していく新たな唯研のスタイルの流れが生まれてきたことになったと思います。したがって、ソ連東欧の崩壊の際にも、全国唯研に大きな動揺はなかったように思います。

この際また、いわゆる「実践的唯物論論争」にも一言ふれるならば、この論争はいろいろな視点から解釈することができますが、ただ、日本においては、これまで述べてきた近代批判・脱近代への重心移動がこの論争に反映されている点からみること重要と思われる。

たとえば、私は、「実践的唯物論」を巡る議論で重要なのは、いわゆる「哲学の根本問題」との関係での議論よりも、むしろ〈生活実践〉との関係だと考えました。マルクスの強調する、「生活過程と反省的意識との関係」において議論することが重要ではないかと考えました。反省的意識を生活過程から考えるということは、「近代哲学の父」デカルトのコギト（反省的意識）の絶対性を想起すると理解されるように、まさに近代批判のアプローチだと思われます。

この関係では、マルクスによる〈言語〉理解は非常に重要な意義をもっていると思いました。言語とは、「実践的な、他の人間たちのためであってこそ、はじめてまた、私自身のためにある現実的な意識である。」（『ドイツ・イデオロギー』）或いはまた、言語とは、「共同本質(Gemeinwesen)の定在、しかも証明を要しないその定在」（『経済学批判要綱』）といったマルクスの印象的な言葉は、

確かに観念論批判であります。いわゆる「哲学の根本問題」という視点から行っているというよりも、近代批判の視角からと理解されるのではないのでしょうか。私は大学院を出る頃から言語に関心を持ち始め、30歳代半ばの1983年に『言語と人間』という本を発刊しましたが、それが予想外に10刷までいったのは、やはり時代の変化と無関係ではなかったように思われます。

そしてさらに、当時、私は、実践概念の内実に関して、もっぱら労働モデルを中心に理解するいわゆる「労働一元論的」傾向に対して、「実践」概念にコミュニケーション行為の視点を取り入れる必要があることを指摘し、マルクスの「交通(Verkehr)」概念をこの点で注目すべきとして強調しました。そして、それをふまえて、実践概念の内実を〈労働とコミュニケーションの内的連関と相互浸透〉の形態において理解すべきと主張しました。その意味で拙著『言語的コミュニケーションと労働の弁証法』は、明示的ではないとはいえ、こういった論争への私なりの応答から生まれたものといえるものです。

3 〈共生共同〉を基礎に新たな連帯へ

全国唯研は、今後、引き続きグローバル資本主義に対する新たな「社会の防衛」のための論戦に役割をはたすとともに、全国唯研の誕生とともに自覚化されてきた時代の課題として、近代批判・脱近代という文明的な課題への取り組みを強めていく必要があるように思われます。

ところで、私自身は、20世紀の最後の四半世紀の日本で、多くの分野の知識人によって語られた「共生」という言葉に注目しました。「異民族の共生」、「異文化の共生」からはじまって、「男女の共生」、「障害者との共生」と、また他方で「人間と自然の共生」「人と動物との共生」など、さまざまに語られました。それらに共通して「異質性の尊重」という含意が本来この「共生」という言葉の提唱にはあります。ただ、この言葉は、

保守的な論者からリベラリスト、エコロジストにいたるさまざまな論者によってそれぞれの思いを込めて語られ、一種の流行語になってしまった感があり、放棄を薦める論者もいます。しかし、私は、この日本発信の言葉の批判的検討を行うなかで、この言葉の真価は、マルチカルチャリズムなどと通底する近代批判の視点から位置づけていくことにあると考えています。(しかも、この日本語の「共生」は人間-人間関係のみならず、人間-自然関係をも意味させることができ、その点で、上記に述べたエコロジー・コミュニケーション問題の解決を志向する表現にできるのではないかと思っているのです。)

そして、私は、この「共生」を〈共同性〉と関わらせることによって、リベラリズムによる「共生」理解から区別される脱近代としての共生理念を明確にしたいと思っています。共同性を基礎におきつつも異質な他者を同化や排除するのではない平等な関係性を実現していく理念として考えたいと思っています。したがってまた、逆に、共同性をこの共生理念に関係づけることによって、新たな共同性の理念の提示になるのではないかと思っています。

そういうことで、私自身は、90年代後半以降、脱近代をめざす人間-自然関係と人間-人間関係を同時に構築していくことを示す理念として私なりに〈共生共同〉の理念を提唱しています。この理念を、繰り返しになります、民主的共同性を基礎にしつつも他者との異質な関係性(共生)を尊重していくものとして理解しています。(その詳細は、拙著『環境思想と人間学の革新』2007年や『現代コミュニケーションと共生共同』1996年をご覧になって頂ければ幸いです。)

そして、この理念に基づく社会ビジョンを「共生型持続可能社会」或いは「共生型共同社会」と呼んで、その内実を、市民社会論の論争成果とコモンズ論の論争成果を統合する仕方でも探究しています。その幾つかのポイントを述べれば、現代のグローバル資本主義へ対抗して市場経済の規制と縮減、共同体の再興・創造、情報技術の民主的利

用、グローバル・ローカルな市民社会と共同体との連携を強調しています。農業を重視し、都市と農村の調和的な社会編成を考えています。

以上、全国唯研の30周年の意義を、私自身の思想のレベルでの〈自分史〉と重ねて述べさせてもらいました。